

## “The Withered Arm”における Rhoda の沈黙

木島菜菜子

Thomas Hardy の短編 “The Withered Arm” (1888) は、乳搾りの仕事をする Rhoda Brook が、ある晩夢魔に襲われ、それを掴んで床に突き落とすと、その時に相手の腕につけた自分の指の跡とよく似た痣が、彼女の昔の恋人 Farmer Lodge の若妻 Gertrude の腕に現れ、次第にその痣が Gertrude の腕を蝕んでいくという、Hardy 自身 “weird” と形容した物語である (*Letters I*, 168)。同じ場所にいるはずのない Rhoda と Gertrude が夢の中で対峙し、Rhoda がつかんだ指の跡が Gertrude の腕を蝕んでいくという超常現象と、Gertrude がその腕の治癒のために絞首刑となった男に触ると、その若者は Rhoda と Lodge の息子だったという後味の悪い結末は、不気味な印象を読者に残す。一方で、これは身分の高い男に誘惑されて捨てられ私生児を産む田舎娘の物語という、古くからバラッドなどに繰り返し謳われてきた物語パターンを踏襲したものでもあり、その点において *Tess of the D'Urbervilles* (1891) と同じ物語の系譜の中に置くことができる (Johnson 131)。しかし “The Withered Arm” では、いわゆる「裏切られた乳搾り娘」の物語の中心にある出会いや誘惑、裏切りのストーリー部分は語りから欠落している (Keys 107)。通常のパターンでは、魅力的であるがゆえに誘惑される乙女が悲劇のヒロインとなり、Hardy の場合にはヒロインの美しさや繊細さは自然界の美に比べられて表現される (“The Romantic Adventures of a Milkmaid” 167; *Tess of the d'Urbervilles* 57; “A Sunday Morning Tragedy” 35)。しかし “The Withered Arm” では、その美しさが泥炭による人工的な光によって照らし出されたときのみ言及される Rhoda は、Farmer Lodge の妻としての立場だけでなく、ストーリーのヒロインの座をも Gertrude に奪われているかのようだ (331)。このように Rhoda の悲劇のヒロイン性は、物語の構造上も Rhoda の人物造形としても欠落し失われている。Rhoda は「身体的にも社会的にも経済的にも、地域社会の周縁に置かれている」 (Johnson 132) が、彼女の物語の欠如は彼女を、ストーリーの構造上も周縁に追いやるものであり、それは彼女の沈黙をもたらす。したがってこの作品において Rhoda の心情はほとんど語られない。本稿は、この Rhoda の心情表現の欠如が夢の中の怪奇現象に関係していること、さらにその Rhoda の夢の中の暴力行為は、Shakespeare の Cleopatra の行為と対をなすことを論じるものである。また、Hardy 自身の物語一般についての考えが、この短編作品の怪奇性と円環構造を説明するものであることを論じる。

Rhoda は物語冒頭、「しゃべらなかつた」女性として登場してくる。読者は彼女が姿を現す前に他の女たちの噂話の中で彼女の境遇を知るが、彼女の胸の内はそのうちの一人の “‘Tis hard for she” というせりふによってのみ推察されるだけである (330)。Rhoda のこの登場は、*Tess of the D'Urbervilles* のヒロイン Tess の物語への登場の仕方と対照的である (Ch.1)。Rhoda は小説冒頭の時点での Tess のように無垢な乙女ではすでになく、社会の中での自己弁護や自己主張の声を喪失してしまっている。

Rhoda は帰宅後、息子に話しかけるが、Kristin Brady はこのときの Rhoda の台詞が、Shakespeare の *Antony and Cleopatra* で Antony と Octavia の結婚の知らせを聞いたときの Cleopatra のせりふに酷似していることを指摘している (390)。この Brady の指摘は、私が調べた限りでは他の批評家には特に着目されてきていないが、この点にはまだ議論の余地が残されているように私には思われる。というのも、Brady が言及している以上に Rhoda と Cleopatra の間には共通点が存在しているからであり、さらにこの二人の人物の類似性は、逆説的にその違いを際立たせ、“The Withered Arm” の中心にある夢の中の Gertrude に対する Rhoda の行為を説明するものとなっているからである。

Rhoda と Cleopatra は、それぞれの作品冒頭で、人物として登場する前に人の噂の中に登場しており、二人の恋の始まりは描かれない。また Rhoda も Cleopatra もライバルについて代理のものに情報を求め、自分との比較をさせるなど、二人の間には複数の類似点が存在している。しかし、Shakespeare の Cleopatra は Antony の結婚の知らせを聞いた途端、嫉妬や怒りの感情を、畳み掛ける言葉だけでなく暴力的な態度によっても存分に表出させる (2.5.60-62)。一方、Hardy の Rhoda は感情を一切表に出すことはない。彼女は知らせを聞いた瞬間にも、声を発することすらないのである。

Cleopatra は、エジプト女王というその地位によって、自己表出の手段を人並み以上に有していると言える。彼女は知らせを持ってきた使者に暴力を振るい、声を荒げ、周囲にはそれを見聞きする従

者たちをおいている。Cleopatraはこのように自分の声を存分に周囲に聞かせることができる。このCleopatraとは極めて対照的に、地位を持たず、周囲から孤立しているRhodaは、自分の声を誰にも聞かせることができない。彼女には息子がいるが、彼も第1章の最後では彼女の言うことにナイフで椅子に切り込みを入れながら“inattentively”に返事をするだけである(331)。

恋人も、それ以外の人間関係も、社会的地位も持たないRhodaは、その全てを有するCleopatraの対極にいる。この対照的な二人がそれぞれの物語の人間関係の中で似たような立場に置かれているのである。この文脈において、Rhodaの夢の中でのGertrudeに対する暴力は、Cleopatraが使用者に振るう暴力に相当する行為であると言える。そしてそれと同時に重要なのは、Cleopatraの暴力が周囲の面前で公然とふるうものであるのに対し、Rhodaのそれは、真夜中の自分の寝室という極めてプライベートな空間で、胸を圧迫されて息ができなくなり、必死に相手をのけようとした結果であるという違いである(335)。この違いは、彼女たちの置かれた立場の違いを一層鮮明にする。

自己表出の声を喪失しているRhodaにとって、この超自然的な暴力行為は失った声を取り戻すきっかけとなり、最終章で、息子の処刑場に現れたGertrudeに対し、‘Hussy – to come between us’ と叫ぶ彼女の声を引き出す(356)。これはGertrudeに対してRhodaが抱いていた感情の唯一の発露である。

しかしこのRhodaの声の回復は一時的なものであり、Rhodaはその後も社会の中で自分の声を発することはなさそうである。このことはこの物語の円環構造によって示唆されている。というのも、物語の最終段落で、再び物語冒頭と同じように、彼女が黙って乳搾りの仕事をしている姿が描かれているからである。年月が経ってもRhodaの置かれた状況に変化がないことは、この円環構造が示唆している。この構造はまた、Rhodaのような社会の中で声を失った女性の悲劇の物語は、歴史の中に幾度となく繰り返されてきたことをも表現しているかのようだ。Hardyは物語というものについて、次のように語っている。

[A] story *must* be striking enough to be worth telling. Therein lies the problem – to reconcile the average with that uncommonness which alone makes it natural that a tale or experience would dwell in the memory and induce repetition. (*The Life of Thomas Hardy* 239)

捨てられた乙女の物語も男女の三角関係も、繰り返し語られ歌われてきたごくありふれた物語であり、未婚の母となった女性たちが社会の中に声を持たなかったことも、世の中にあふれるごくありふれた現実である。こうした周囲にあふれる「月並みなもの」を、“weird”な超自然的要素という「尋常ではない」要素を取り入れて提示することで、Hardyは繰り返し語るに足る物語としようとした。上に引用したHardyの言葉は、まさに同じ物語が繰り返されるかのような感覚を与える円環構造を持つ、Hardy版「裏切られた乳搾り娘」の物語の一つである“The Withered Arm”の構造と、その不気味な物語展開とを、説明するものとなっていると言えるのではないだろうか。

#### Works Cited

- Brady, Kristin. “Notes: ‘The Withered Arm.’” *The Withered Arm and Other Stories: 1874-1888*. By Thomas Hardy, edited by Kristin Brady, Penguin, 1999, pp. 389-94.
- Hardy, Florence Emily. *The Life of Thomas Hardy: 1840-1928*. Archon, 1970.
- Hardy, Thomas. “A Sunday Morning Tragedy.” 1904. *Thomas Hardy: Selected Poems*. Edited by Harry Thomas, Penguin, 1993, pp. 35-38.
- . “The Romantic Adventures of a Milkmaid.” 1883. *The Withered Arm and Other Stories: 1874-1888*. By Thomas Hardy, edited by Kristin Brady, Penguin, 1999, pp. 162-249.
- . *Tess of the D’Urbervilles*. 1891. Edited by Scott Elledge, Norton, 1991.
- . “The Withered Arm.” 1888. *The Withered Arm and Other Stories: 1874-1888*. By Thomas Hardy, edited by Kristin Brady, Penguin, 1999, pp. 329-57.
- Johnson, Suzanne R. “Metamorphosis, Desire, and the Fantastic in Thomas Hardy’s ‘The Withered Arm.’” *Modern Language Studies*, vol. 23, no. 4, Autumn 1993, pp. 131-41.
- Keys, Romey T. “Hardy’s Uncanny Narrative: A Reading of ‘The Withered Arm.’” *Texas Studies in Literature and Language*, vol. 27, no. 1, 1985, pp. 106-23.
- Shakespeare, William. *Antony and Cleopatra*. Edited by John Wilders, Arden, 1995.

